関西学院大学社会学部卒業生の生活と意識に関する調査

―集計速報版―

2010 年 4 月
関西学院大学社会学部 50 周年記念事業委員会
安藤文四郎・渡邊勉
卒業生調査分析グループ
中野康人・岡本卓也

調査の概要

【調査の目的】

第 1 の目的は、卒業生の人生をたどっていくことにより、社会学部での教育、学生生活とは何であったのか、その後の人生にどのような意味や影響を与えているのかについて明らかにすることです。第 2 の目的は、卒業生の意見を探ることで、社会学部のこれまでの 50 年を振り返り、これから先の社会学部の新しいあり方を探っていくことです。

【調査の対象】　関西学院大学社会学部卒業生の 7551 名

【調査期間】　2009 年 9 月～2010 年 2 月

【調査方法】　郵送による配布・回収

【サンプル抽出】　同窓会名簿からの無作為抽出法

【回収数】　2164 票（28.7%）

結果をご覧いただくにあたって

- 速報では、調査結果の一部を紹介しています。
- 結果は％で表記しています。％の基となる数は原則として調査票回収数です。しかし、各質問に対して非回答のものは除外しています。そのため、質問ごとに％の基となる数は異なります。
- 一部の質問で選択肢が調査票と異なるものがありますが、回答の主旨を変えるものではありません。
- グラフの横軸(縦軸)は最大が 100%ですが、データの分布によって一部変更しているものもあります。
- 複数回答とは、当てはまるものすべてについてお答えいただくものです。
- この速報にある数値は速報値ですので、後ほど一部修正される可能性があります。他に引用される場合は、事前に事務局までお知らせ下さい。

1．回答者のプロフィール

1.1 性別と卒業年

最初に、今回の調査にご回答いただいた 2164 名の卒業生の方々の性別と卒業年を見てみましょう。図 1 は、性別と卒業年の組み合わせの回答者全体における比率を示しています。男女で見ると、男性が 53.4%、女性が 46.4%とやや男性の回答者が多くなっています。また卒業年で見ると、70 年代の卒業生が 24.9%で最も多く、続いて 80 年代(22.6%)、90 年代(19.5%)、2000 年代(17.6%)、60 年代（15.5%）の順になっています。男性は高齢の世代の比率が高く、女性は逆に若い世代の比率が高くなっています。全体では、70 年代男性が 13.8%で最も多く、80 年代男性、60 年代男性、2000 年代女性の順となっています（図 1)。

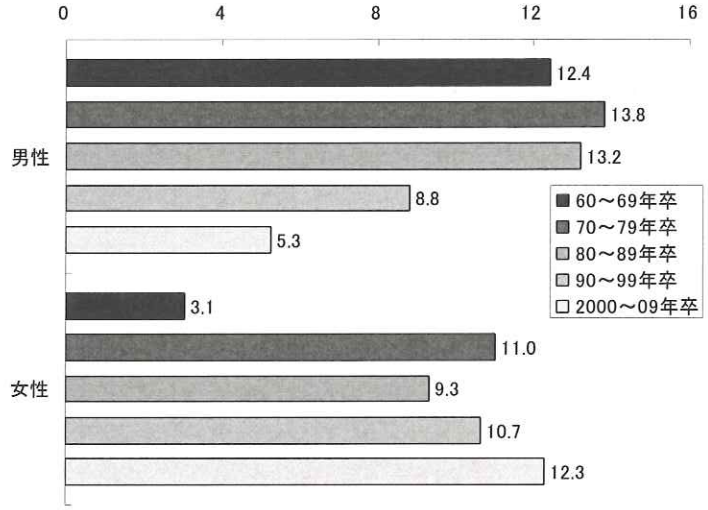

図 1. 性別と卒業年（全体比率）

1.2 出身県

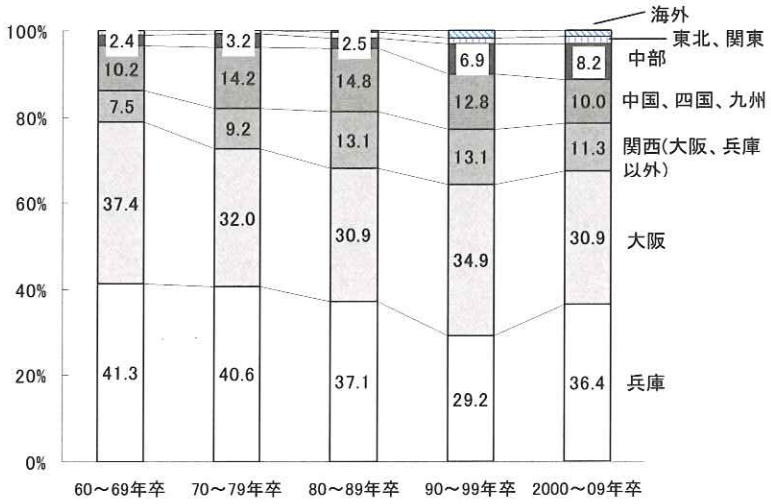

図 2. 出身県

次に、回答者の出身高校の都道府県を見てみましょう（図 2)。兵庫、大阪、関西地方（兵庫、

大阪を除く)、中国・四国・九州地方、中部地方、東北・関東地方、海外に分類して、卒業年別にまとめたのが、図2です。兵庫県出身者は、60年代には41.3%と高く、2000年代には36.4%と微減しています。また大阪府出身者も37.4%から30.9%へと減少傾向にあります。兵庫県と大阪府を合わせると、60年代には約8割であったのが、2000年代には7割弱と減少傾向にありますが、現在も高い割合を占めていることがわかります。その他の地域を見ると、大阪、兵庫以外の関西地方と中部地方の出身者がやや増加しています。

2. 社会学部への入学

2.1 第一志望

まず、関西学院大学の社会学部が第一志望であったかどうかを尋ねました（図3)。社会学部が第一志望であった方は、80年代までは、20～35%程度であったのが、90年代以降、4割から5割まで増加しています。一方、関学の他学部が第一志望であった方は、2000年代には1割程度にまで減少しています。関学以外の私大を第一志望であった方は、80年代（23.1%)、90年代（18.9%）にやや増加していますが、2000年代には減少しています。国公立大学を第一志望としていた方は、70年代と2000年代にやや多くなっています。

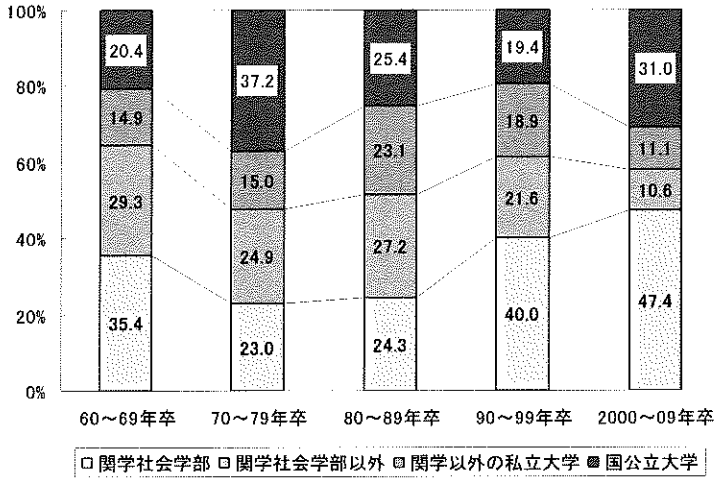

図3. 第一志望

2.2 関学社会学部以外の受験

次に、関学の社会学部以外の受験について尋ねました（図4)。まず関学の社会学部以外の学部の受験は、60年代に50.0%で80年代までは増加していますが、その後減少し、2000年代は53.6%になっています。同志社大学は減少傾向、立命館大学はやや増加傾向、関西大学は増加傾向にあります。関関同立以外の私立大学は80年代以降急増しています。国公立大学の受験は70年代と2000年代が多くなっています。

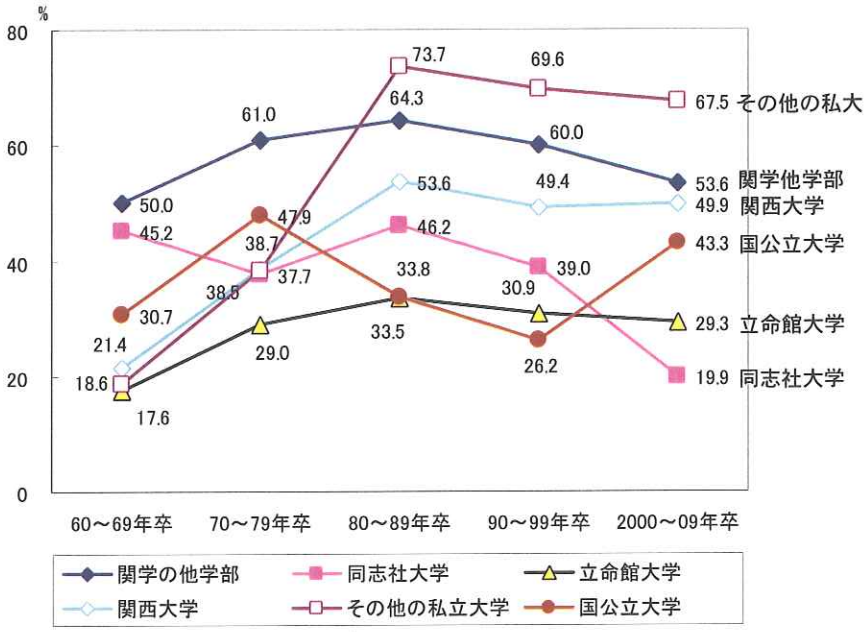

図 4. 他大学の受験

2.3 社会学部選択理由

さらに、関学社会学部を選んだ理由について、複数回答で尋ねました。それをまとめたのが図5です。

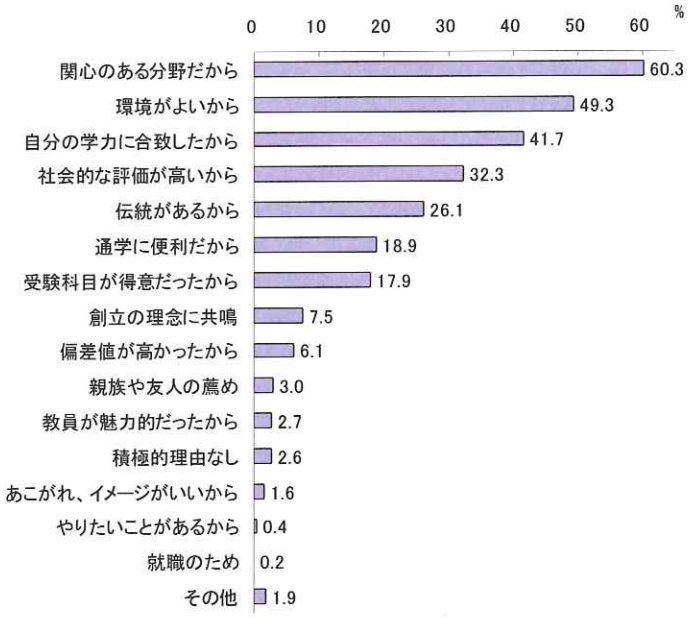

図 5. 関学社会学部の選択理由

最も多い理由は、「関心のある分野だったから」という理由で、60.3%です。続いて、「環境がよいから」(49.3%)、「自分の学力に合致したから」(41.7%)、「社会的な評価が高いから」(32.3%)、「伝統があるから」(26.1%) と続いています。卒業年で比較してみると、「関心のある分野だったから」は 90 年代までは 4 割程度であったのが、2000 年代には 55.2%へと増加しています。「環境がよいから」、「社会的な評価が高いから」という理由は、卒業年によって大きな相違はなく、関

学のブランドとしての環境や社会的評価は変わりなく入学の動機となっていることがわかります。一方、「自分の学力に合致したから」、「受験科目が得意だったから」は、前者は 16.9%から 8.6%へ、後者は 8.3%から 0.3%へと減少しています。

3. 社会学部での生活

次に、社会学部に入学後の生活について見ていくことにしましょう。

3.1 講義の出席状況と成績

まず、学生時代の講義の出席について見てみましょう（図 6）。出席状況は、60 年代卒業生では「よく出席していた」が 42.3%でしたが、80 年代には 25.9%まで減少しています。その後増加し、2000 年代には 39.0%に増加しています。

次に成績について見ると、80 年代の卒業生までは、成績の分布はあまり変わりなく、「ほとんど優」+「優が多い」と「優は少ない」+「ほとんど優はない」の比率がほぼ同じです。しかし 90 年代以降は、「優は少ない」「ほとんど優はない」の比率が低くなっています（図 7）。

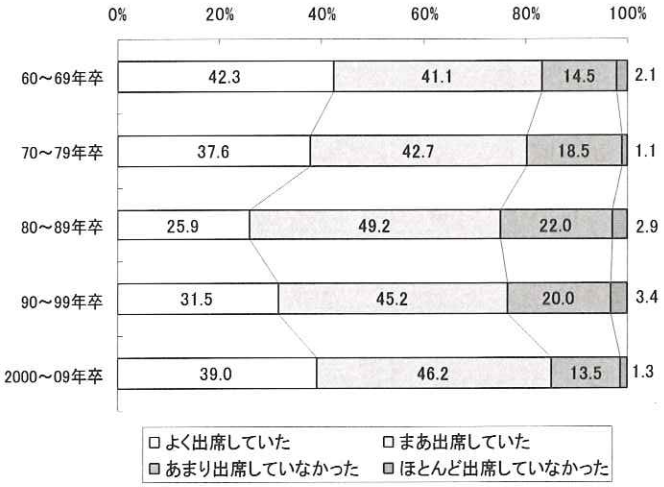

図 6. 講義の出席状況

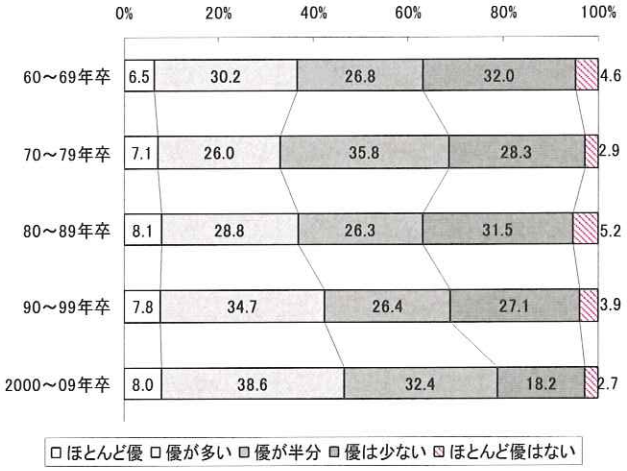

図 7. 成績

3.2 講義やゼミへの満足度

さらに、在学中の講義やゼミへの満足度を尋ねました（図 8）。全体を通じて最も満足度が高かったのは、大学施設であり、50.6%が「とても満足」、45.0%が「まあ満足」であり、95%以上の卒業生が満足しています。同様に友人関係も 9 割以上の方々が満足しています。さらに指導教員、ゼミについては 7 割以上の方々が満足しています。逆に実習には 5 割程度の方々しか満足していません。アルバイトについては、若い世代と高齢の世代の差が大きく、若い世代において満足度が高くなっています。

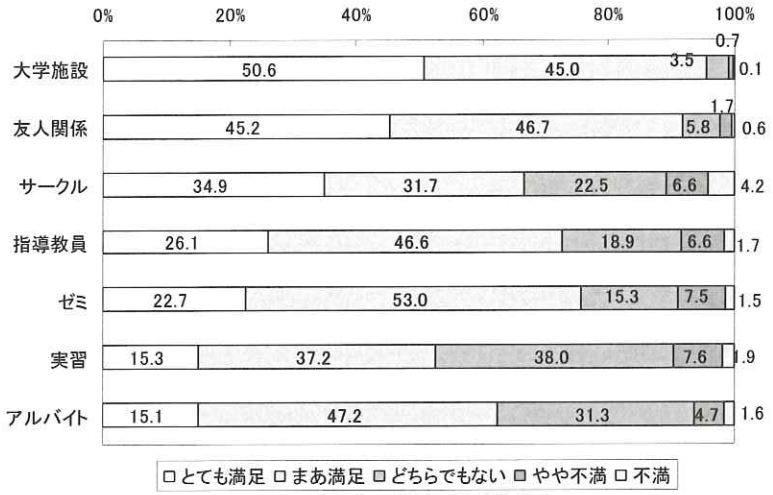

図 8. 満足度(全体)

3.3 講義のない日の過ごし方

卒業生の方々は、講義の無い日にどのような過ごし方をしていたのでしょうか。全体では「アルバイト」が最も多く約 60%、次いで「サークル」(39%)、「旅行」(19%)、「部・クラブ」(16%)、「買い物」(10%)、「読書」(7%)、「勉強」(6%)などの順になっています（図 9)。

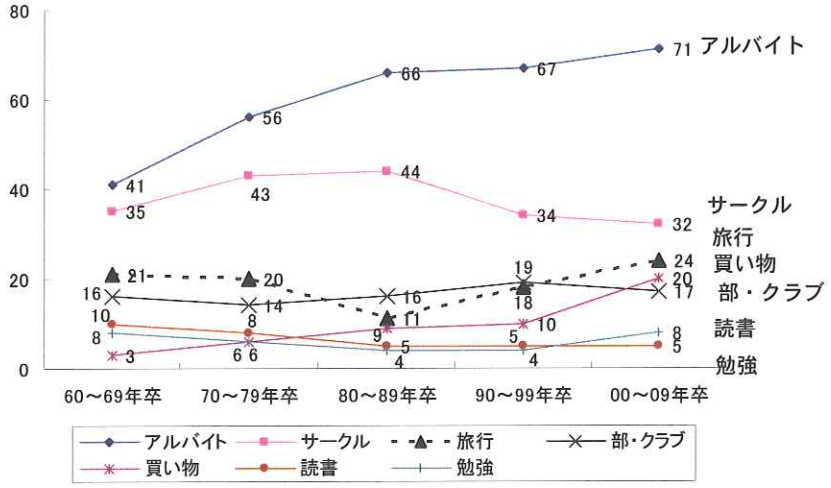

図 9. 講義のない日の過ごし方

年代別に見てみると、「アルバイト」は若い世代ほどその割合が増えており、60 年代に 40%ほどだったものが 2000 年代には 70%を超えています。一方、「サークル」は 80 年代が最も盛んで、反対に「旅行」は 80 年代が最も低調となっています。「買い物」は若い世代ほど割合が増加しており、60 年代では 3%ほどだったものが 00 年代には 20%を超えるようになっています。「読書」は 60 年代には 10%ほどだったものが 80 年代以降半減して 5%程度になっています。「部・クラブ」は一定して 15%ほどです。「勉強」は、60 年代は 8%ほどであったが 80・90 年代には半減して 4%ほどになりました。ところが、00 年代に再び 8%へと増加しています。

3.4 印象に残った本

学生時代に読んで印象に残った本については、ゼミや講義で読んだ学術的な書籍がある一方で、小説を挙げる方もいました。学術的な書籍では、『菊と刀』(2%)、『甘えの構造』(1%)、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(1%)、『自由からの逃走』(1%)が多くあげられていました。小説では、『ノルウェイの森』『坂の上の雲』『罪と罰』『青春の門』、作家名としては、司馬遼太郎、村上春樹、遠藤周作、夏目漱石などを挙げる回答者が多くいました（それぞれ 1%ずつ）。

小説については、卒業年次による違いが顕著でした。漱石を挙げているのは 60 年代卒業生が多く、司馬遼太郎や遠藤周作は 70～80 年代の卒業生が比較的多く挙げています。一方、80 年代以降の卒業生では、村上春樹を挙げる卒業生が多くなっています。

その他、『聖書』を挙げている回答者も少なからずいます（1%）。

4. 就職活動

次に大学卒業後の生活について見ていきましょう。

4.1 就職活動の時期

まず、就職活動をはじめた時期について尋ねました。図 10 は累積比率を示しています。80 年代までは、3 年生のうちに就職活動を始めた方は、3 割程度でした。しかし、90 年代以降の卒業生は、3 年生の秋以降に就職活動をはじめる方が急速に増え始めており、1996 年の就職協定廃止の影響が大きくあらわれていることがわかります。2000 年代では 3 年生の間に 8 割以上の方が就職活動をはじめています。

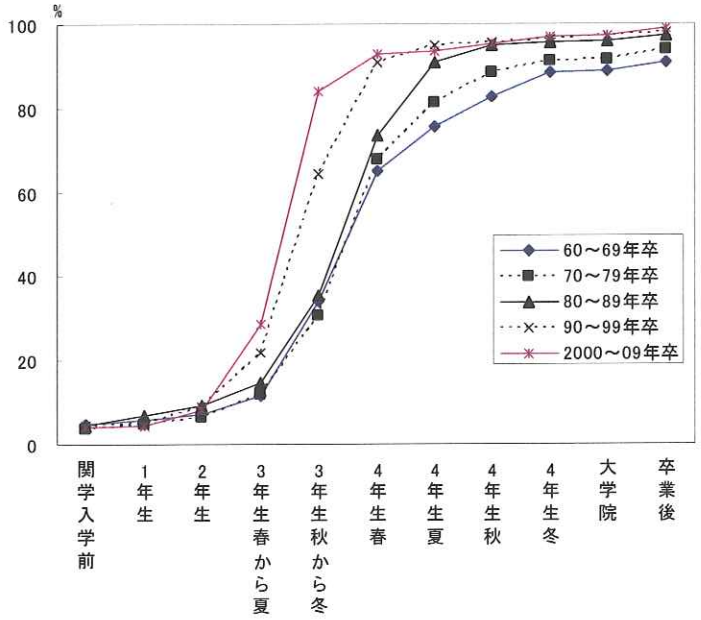

図 10. 就職活動開始時期

4.2 就職先を決める際の考慮点

就職活動中、就職先を決めるときの考慮点について尋ねました（図 11）。60 年代卒業生では「能

力が活かせるかどうか」（能力発揮）を上げる比率が最も高く（64.7%）、続いて「面白い仕事かどうか」（おもしろさ）（42.3%）となっています。しかし、能力発揮は若い世代になるに従い減少し、おもしろさは増加しています。さらに「職場の雰囲気が良いかどうか」は 60 年代には 13.5%と選択肢の中で最も低い比率でしたが、2000 年代には 50.6%にまで増加しています。仕事を自己実現、能力発揮の場として考える方々が多かったのに対して、近年では仕事をする場の心地よさを重視する方々が増えていることがわかります。

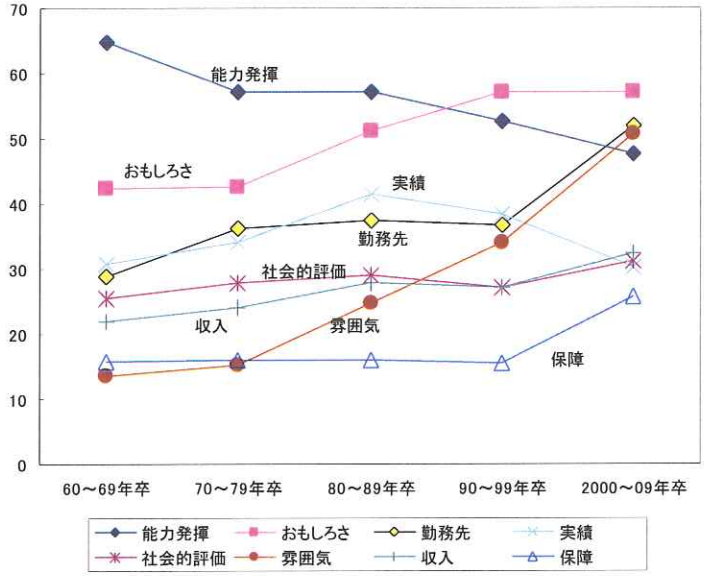

図 11. 就職先選択の基準

4.3 入職経路

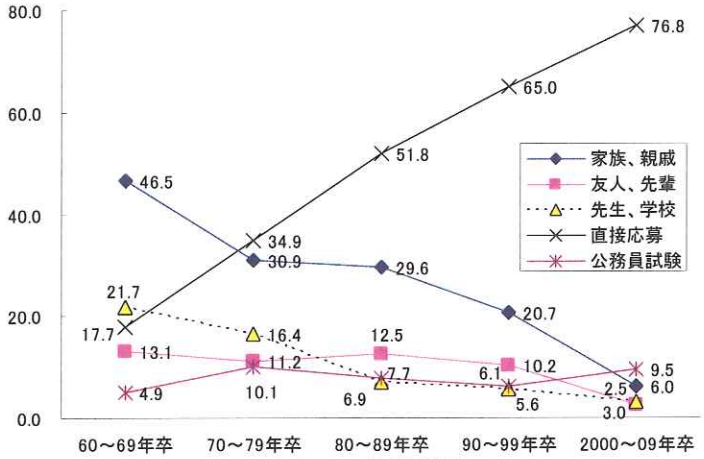

図 12. 入職経路

次に、初職への入職経路について尋ねました（図 12）。自分で直接応募（職業紹介機関の紹介も含む）が 60 年代卒業生では 17.7%であったのに対して、その後急激な増加傾向にあり、2000 年代卒業生では 76.8%にまで増加しています。一方、家族・親戚の紹介による入職は、60 年代卒

業生は46.5%と最も多かったのが、2000年代には6.0%にまで減少してします。さらに先生、学校の紹介による入職も大きく減少しています。

5. 職業

5.1 卒業後進路

まず大学卒業後の進路について見ていくことにしましょう。

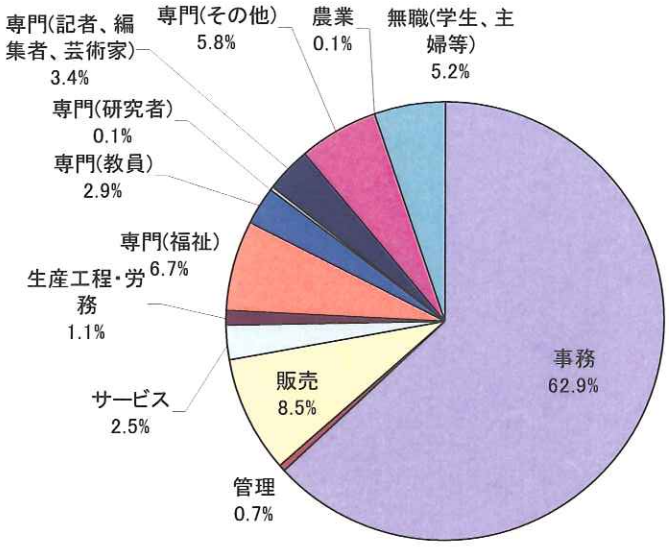

図 13. 卒業後進路

図13は、大学卒業後の進路をあらわしています。最も多いのは、事務職に就く方々で、62.9%となっています。続いて販売職（8.5%）、専門（福祉）職（6.7%）、専門（その他）職（5.8%）、無職（5.2%）と続いています。専門職をまとめると、19.0%と、事務職の次に高い比率になっています。また無職の大半は、大学院や専門学校など、卒業後さらに学業を続けている方となっています。

5.2 現職

次に現在の職業について見ていきましょう。

現在の職業については、事務職（40.3%）が最も多く、続いて無職（18.3%）、管理職（8.6%）、専門（その他）職（7.7%）、販売職（6.0%）、専門（福祉）職（5.1%）となっています。無職は、女性が29.1%、男性が8.6%となっています。女性は家事、子育てが多く、男性については定年退職の方々が大半です。初職と比べると、男性では事務職、販売職が減少し、管理職、専門（教員、研究者、その他）職が増加しています。女性は事務職、専門（福祉）職が減少し、無職、管理職、専門（教員、研究者）職が増加しています。

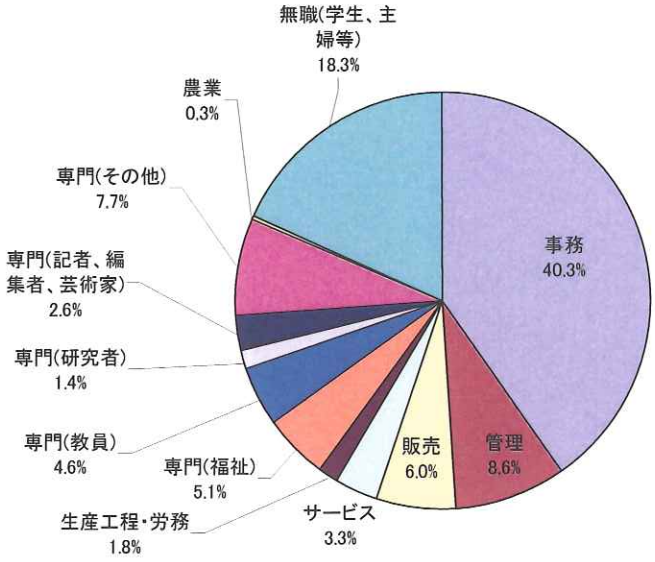

図 14. 現職

5.3 仕事の重視度

仕事をしていく上で、どのような側面を重視しているかを尋ねました（項目については表 1 を参照）。「非常に重視する」を 4 点とし、「全く重視せず」を 0 点として各側面の平均を求めました。全体として最も重視している（得点が高い）のは、「職場の雰囲気がよい」(3.23)、続いて「自分の知識・アイデアを活かせる」(3.18)、「仕事のやり方やペースを決められる」(3.04)、「社会的に役立つ仕事ができる」(2.98) となっています。

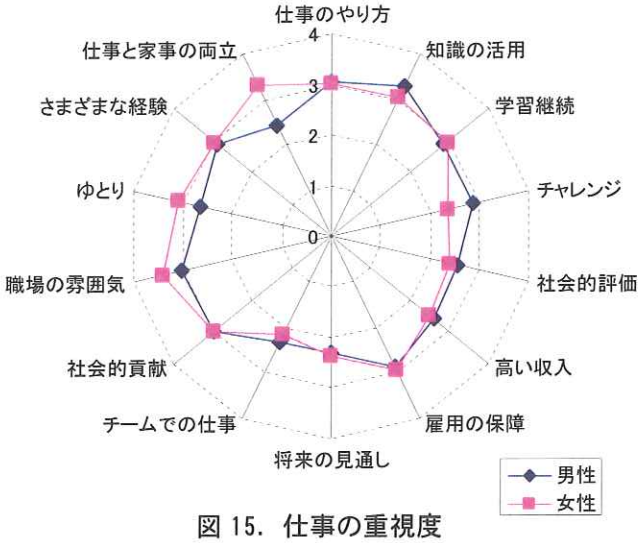

図 15. 仕事の重視度

表 1. 仕事の重視度項目

仕事のやり方：仕事のやり方やペースを決められる（3.04）	知識の活用：自分の知識・アイデアを活かせる（3.18）
学習継続：学習を続け、深められる（2.92）	チャレンジ：チャレンジングな仕事である（2.62）
社会的評価：社会的評価・ステータスがある（2.48）	高い収入：高い収入が得られる（2.56）
雇用の保障：雇用と身分の保障がある（2.92）	将来の見通し：将来のキャリアの見通しがある（2.34）
チームでの仕事：チームの中で仕事ができる（2.26）	社会的貢献：社会的に役立つ仕事ができる（2.98）
職場の雰囲気：職場の雰囲気がよい（3.23）	ゆとり：余暇に費やす時間的にゆとりがある（2.87）
さまざまな経験：仕事でさまざまな経験ができる（2.92）	仕事と家庭の両立：仕事と家事の両立ができる（2.85）

（括弧内は全体の平均値）

さらに男女差に注目すると（図 15)、男性は知識の活用、チャレンジ、社会的評価を重視し、女性は職場の雰囲気、仕事と家庭の両立を重視する傾向があります。

5.4 仕事の充足度

職業のさまざまな側面について、充足度を見てみました。図 16 のそれぞれの項目について値が大きいほど、充足されていることを示しています。全体では、仕事のやり方、知識の活用、職場の雰囲気、社会的貢献などの項目で充足度が高くなっています。男女の違いを見ると、男性は、チャレンジ、高い収入、雇用の保障、将来の見通しなどの項目で充足度が高く、女性は職場の雰囲気、ゆとり、仕事と家事の両立などの項目で充足度が高くなっています。

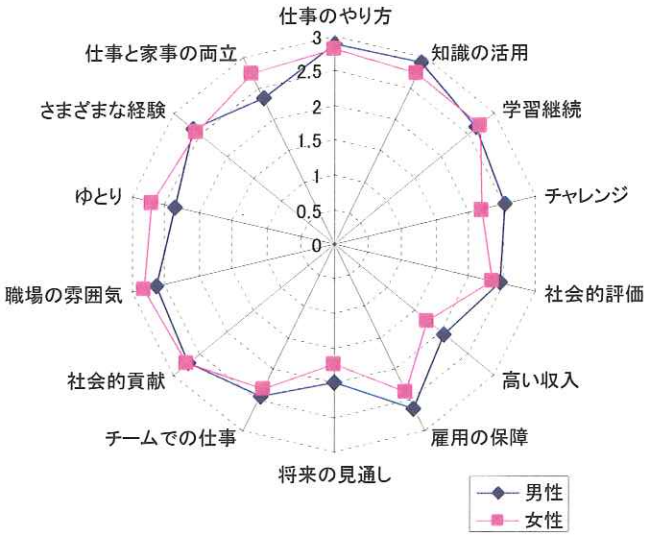

図 16. 仕事の充足度

5.5 仕事に必要な能力

現在の仕事をおこなっていく上で、必要な能力について尋ねました（複数回答)。最も必要とされている能力は、コミュニケーション能力であり、86.3%の方々が重要だと考えています。続いて、幅広い教養、情報収集力、創造力が重要だと考えています。一方、語学力、理論的知識については重視する方があまり多くありません。

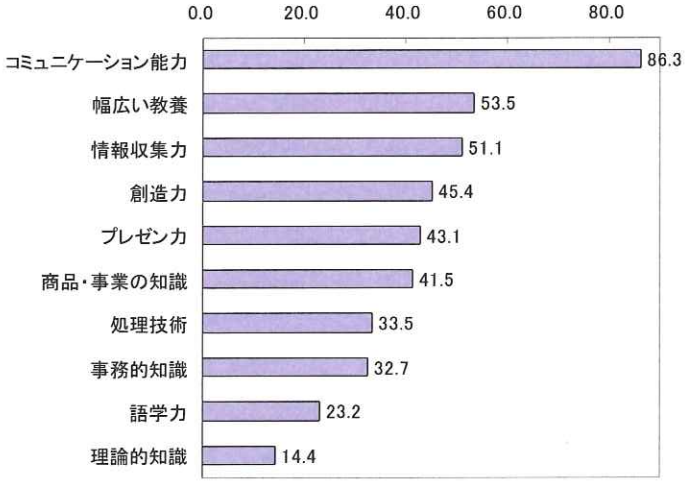

図 17. 仕事に必要な能力

5.6 仕事の満足度

現在、職業に就いている方々の仕事満足度を見てみましょう。図 18 から、60 年代卒では 40.5%と多くの方々が満足していますが、若い世代になるに従い、仕事へ満足している方の比率が低くなっており、2000 年代の卒業性では 19.8%にまで減少しています。また不満を感じている方々（「あ

まり満足ではない」+「まったく満足ではない」）も 60 年代卒では 4.6%であったのが、2000 年代には 12.7%に増加しています。

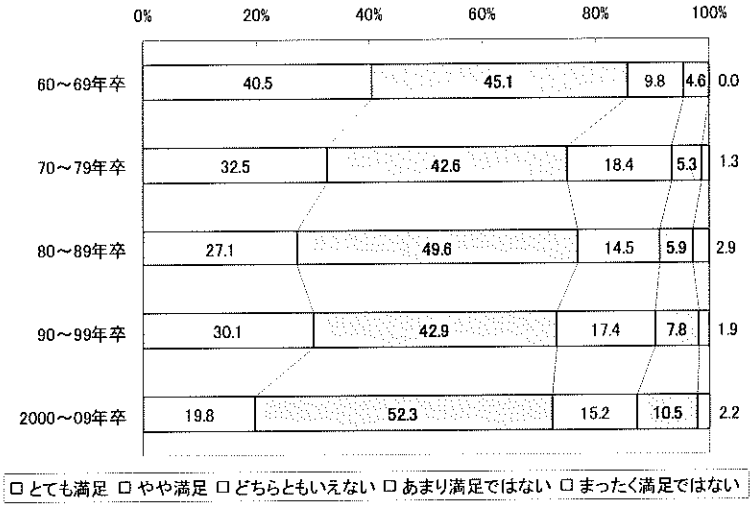

図 18. 仕事満足度

6. 生活

次に現在の生活について見ていくことにしましょう。

6.1 生活満足度

まず、現在の生活に対する満足感を尋ねました。全体として満足している方（「非常に満足」+「満足」）は、8 割近くにのぼっており、高い比率となっています。卒業年別に見ると、60 年代卒業の方たちの満足度がやや高く、70 年代以降の卒業生については、あまり違いがありません。男女でも違いはありません。

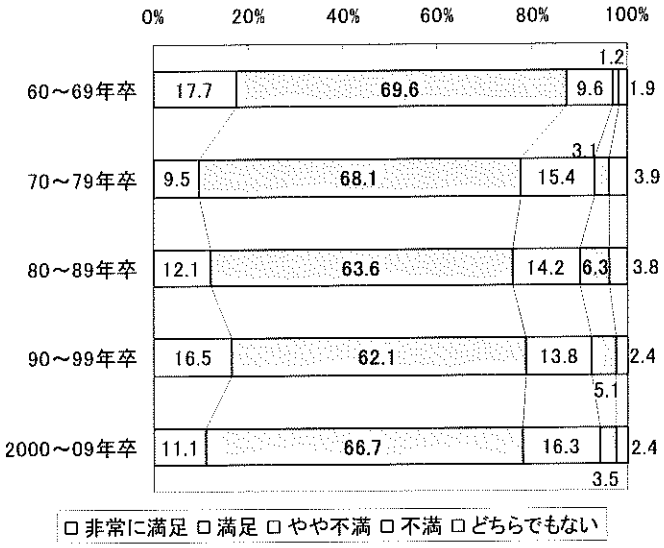

図 19. 生活満足度

6.2 団体への加入

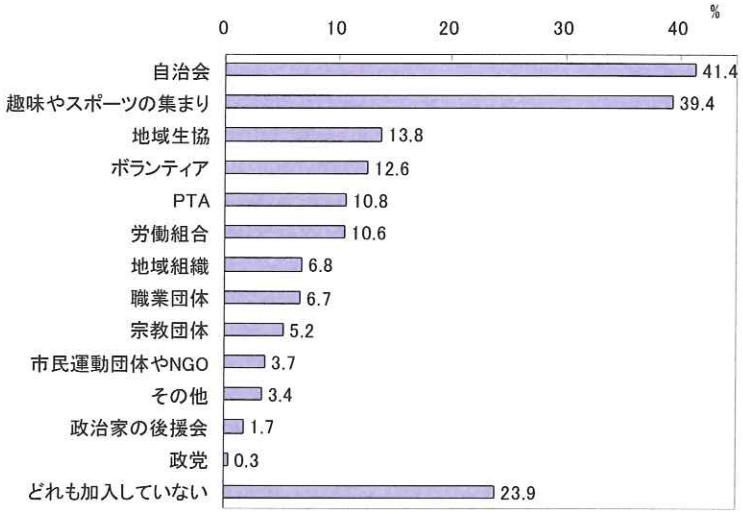

図 20. 加入団体

次に、現在の組織加入について尋ねました。自治会への参加が最も多く、41.4%の方が参加しています。次に趣味やスポーツの集まり、地域生協、ボランティア、PTA、労働組合と続いています。女性の参加が目立って多いのは、地域生協、PTA、趣味やスポーツの集まりであり、男性の参加が目立って多いのは職業団体です。年代別では、自治会、地域組織、職業団体、ボランティア、趣味やスポーツの集まりは年長の世代のほうが若い世代よりも参加が多くなっています。逆に労働組合は若い世代のほうが多く、どれにも参加していない人の比率も若い世代のほうが多くなっています。

6.3 知人

図 21. 関学出身友人数

次に、関学出身の現在の友人数について見てみましょう（図 21）。回答者の方々の現在の関学

出身の友人数は、0 人が 4.8%、1～5 人が 46.1%、6～10 人が 29.6%、11～20 人が 12.9%、21 人以上が 6.6%となっています。男女別に比較してみると、女性は 0 人が少なく、6～10 人が多くなっています。また卒業年別に平均値を見ると、60 年代卒が 12.4 人、70 年代卒が 8.9 人、80 年代卒が 8.1 人、90 年代卒が 8.7 人、2000 年代卒が 11.9 人となっており、60 年代卒と 2000 年代卒の卒業生の方々の友人数が多いことがわかります。図 21 から見ても、60 年代と 2000 年代卒の卒業生の 6～7 割は 5 人以上の関学の友人がおり、他の年代よりも友人数が多いことがわかります。

表 2. 各職業の知り合いの有無

職業	%	職業	%	職業	%	職業	%	職業	%
中小企業の課長	67.1	薬剤師	26.3	農家	18.8	国会議員	6.3	印刷工	3.7
医師	45.7	市役所職員	25.5	商店の店主	18.1	現場監督	5.9	食品製造工	3.4
事務員	42.6	銀行員	25.1	理容師	17.3	高級官僚	5.7	家具職人	2.9
大会社の課長	42.3	警察官	24.6	小売店主	15.3	プロスポーツ選手	5.4	裁判官	2.6
セールスマン	37.1	保険の勧誘員	23.6	コック	14.5	バス運転手	5.0	電車運転手	2.3
小学校教諭	36.7	寺の住職	23.2	大工	13.3	郵便配達人	4.7	清掃夫	2.2
守衛	31.4	建築士	23.1	大会社の社長	12.9	機械設計技術者	4.7	大企業の機械組立工	2.1
大学教授	31.3	情報処理技術者	23.0	客室乗務員	11.8	ウェイトレス	4.7	鉄道工夫	0.4
看護師	28.7	パイロット	21.7	卸売店主	10.9	服飾デザイナー	4.6		
公認会計士	27.0	保育士	21.4	自動車修理工	9.7	鉄道の駅員	4.1		
銀行の窓口係	26.5	音楽家	21.1	電気工事人	9.4	科学者	4.0		

さらに卒業生の方々の交際範囲を明らかにするために、さまざまな職業について、知り合いがいるかどうかについて尋ねました（表 2）。最も多かったのは、中小企業の課長（67.1%）であり、続いて医師（45.7%）、事務員（42.6%）、大会社の課長（42.3%）、セールスマン（37.1%）、小学校教諭（36.7%）、守衛（31.4%）、大学教授（31.3%）、看護師（28.7%）、公認会計士（27.0%）、銀行の窓口係（26.5%）と続いています。企業のホワイトカラー（中小企業の課長、事務員、大会社の課長など）と専門職（医師、大学教授、看護師、公認会計士など）が多いことがわかります。

表 3. 関学卒業生の知り合い（5%以上）

職業	%	職業	%
銀行員	29.3	公認会計士	11.0
中小企業の経営者	29.2	保険の勧誘員	8.0
大会社の課長	21.0	小学校教諭	7.9
事務員	19.0	警察官	7.8
セールスマン	18.8	情報処理技術者	7.0
市役所職員	17.7	客室乗務員	5.4
大学教授	12.5	大会社の社長	5.2
銀行の窓口係	11.9		

次に、関学卒業生との交際範囲も同様に尋ねました（表 3）。関学卒業生の知り合いで多いのは、銀行員（29.3%）、中小企業の経営者（29.2%）、大会社の課長（21.0%）、事務員（19.0%）、セールスマン（18.8%）と続いています。

7. 関西学院大学のイメージ、意見

7.1 関西学院大学で思い浮かべる場所

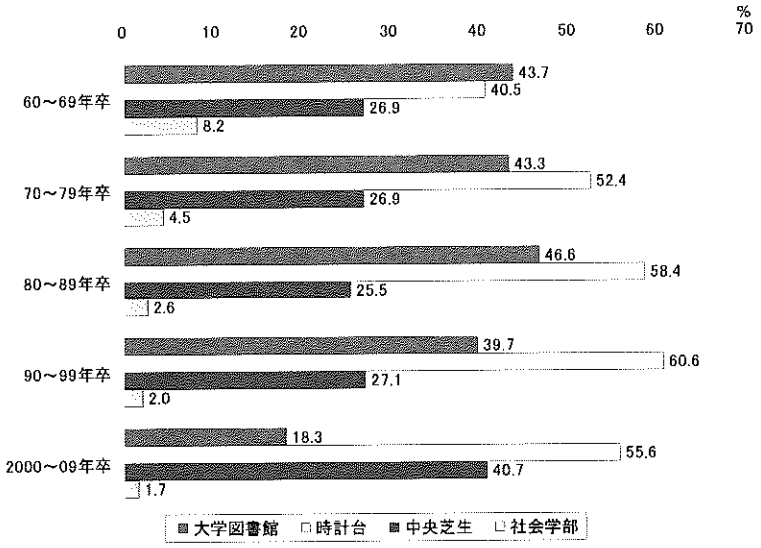

図 22. 関学で思い浮かべる場所

まず関西学院大学と聞いたときに、真っ先に思い浮かべるものを見てみましょう。60 年代から 80 年代までは「大学図書館」や「時計台」が 50%前後と高かったのですが、90 年代頃からは「大学図書館」の割合が減ってきて、「中央芝生」の割合が増えてくる傾向があるようです。

7.2 思い出の場所

表 4. 思い出の場所

	1960～69年卒	70～79年卒	80～89年卒	90～99年卒	2000～09年卒
1	中央芝生 (37%)	中央芝生 (42%)	中央芝生 (39%)	学生会館新館 (37%)	学生会館新館 (24%)
2	時計台 (14%)	第五別館 (22%)	社会学部 (19%)	中央芝生 (33%)	中央芝生 (22%)
3	大学図書館 (13%)	社会学部 (20%)	時計台 (16%)	時計台 (19%)	社会学部 (15%)
4	社会学部 (12%)	時計台 (20%)	第五別館 (15%)	社会学部 (17%)	大学図書館 (14%)
5	学生会館旧館 (9%)	学生会館旧館 (17%)	学生会館旧館 (15%)	大学図書館 (15%)	時計台 (12%)
6	学生食堂 (9%)	学生食堂 (14%)	大学図書館 (14%)	学生会館旧館 (11%)	学生会館旧館 (11%)
7	日本庭園 (4%)	大学図書館 (13%)	学生会館新館 (13%)	第五別館 (6%)	E号館 (4%)
8	第五別館 (3%)	第二学生会館 (10%)	学生食堂 (12%)	社会心理学研究館 (4%)	第五別館 (3%)
9	運動場 (3%)	宗教センター (6%)	社会心理学研究館 (6%)	宗教センター (3%)	B号館 (2%)
10	第二学生会館 (3%)	社会心理学研究館(5%)	宗教センター (3%)	ランバス記念礼拝堂 (3%)	総合体育館 (2%)

表 4 は、学生時代の思い出深い場所の上位 10 箇所（複数回答）です。「中央芝生」はあらゆる年代を通して多く、20%以上の人が思い出深い場所としてあげています。「時計台」や「社会学部」も一貫して 10%以上の人が何らかの思い出を持っているようです。一方で、「第五別館」は 70 年代（15%）、80 年代（22%）と高いのに対して、90 年代以降は 6%、3%と低い値になっています。90 年代以降に思い出深い場所として増えてきたのは「学生会館新館」で、90 年代（37%）、2000 年代（24%）と高い値となっています。「中央芝生」「時計台」の思い出の中身をみてみると、友人との語らいやその美しさが心に残っているようです。「社会学部」の中身は、友人と一緒に受けた授業や友人との出会いが心に残っているようです。「配偶者との出会い」という思い出もありました。

7.3 関西学院大学への思い

関西学院大学との心理的なつながりをまとめてみると、大きく 3 つに分けることができます。1 つ目は「関学出身であることの誇り」で、2 つ目は「関学生への情緒的な思い入れ」、3 つ目は「関西学院大学そのものへの愛着」です。図 23 はそれぞれの年代ごとの平均点です。最大値が 5 点で、値が大きいほどその思いが強いことを意味しています。どの年代でも「誇り」が最も高く、続いて「大学そのものへの愛着」、「関学生への思い入れ」と続きます。いずれも 80 年代の卒業生が最も高く、「関学生への思い入れ」については 2000 年代も同じくらい高い値になっています。また、男女別では全般に男性の方が高い値になっていますが、2000 年代では女性の方が全ての項目について高い値になっています。

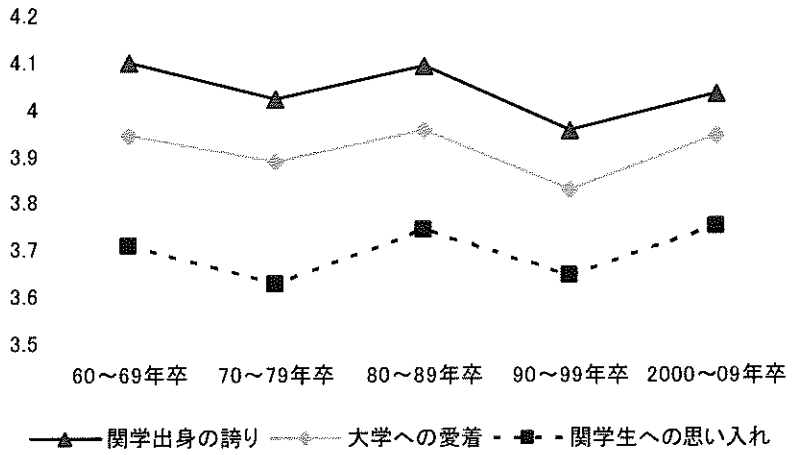

図 23. 大学への思い